

大声で白水家も私も飛び上り、何人来たねと聞くと六、七人いるよ、おばさんは赤ちゃんをおぶっているよ、私も長男照昭をおぶっての脱出であった。

お陰で皆々の関係者の方々が生命をかけて助けてくれたお陰で本日まで無事生計を保つことが出来ました。妻も本当に引揚までまた引揚て来てからも並大抵でない苦勞をし四十四才で他界したが、子供たち全員、私を含めて健康であり。あの時、あのころを思い忘れることはないと思う。

なかなか書き表わすことは難しく不明の点はよろしく理解して下さい。まだまだ私より以上の危険に苦しまれた方々も多いと思います。戦争がもたらしたこのような手記を読み、これからは戦争を絶対に無くしましょう。

栄光と苦勞満州奉天引き揚げ者

東京都 山口 是知

私は昭和二十一年八月十五日満州奉天から長崎に引き揚げた者である。

第二次世界大戦は、枢軸国側に不利となり、まずイタリヤが連合国に降伏し、ついで昭和二十年五月、ドイツが降伏するにおよび、日本ひとり連合国と戦争をつづけるにいたった。戦局は日に日に悪化していた。沖繩が占領されるにおよび、敗戦は決定的であったが、私はなお最後の神風きたるを信じていた。

しかるに八月九日、ソ連軍参戦におよび、戦局は急速に悪化した。広島、長崎に原爆が投下されたことが日本の降伏にいたらしめた大きな原因ではあるが、われわれ在満州にとっては、ソ連の中立条約を破棄した南侵こそ決定的な打撃であった。

北満開拓団員が銃をもち、妻子の手を引いてぞくぞくと奉天に南下してきて、事の一大事を悟った。在奉天の日本人老幼婦女にも避難命令が出たが、わが家は、いわ

ば敵中に避難するの愚を考えて、家族一同とどまることにした。

十二、三日頃に、ソ連軍戦車に対する壕を掘るようにと住民に軍からの命令があった。みずからの生命を守るために私たちは奉天市加藤町に戦車壕を掘った。十四日におよび、戦局にわかに好転、ソ連と話がついたというので中止となった。

しかし眞実は、日本軍の全面降伏であった、十五日天皇の詔勅をラジオで聞くにおよび、われわれの生命財産を守る者は、軍も警察もなくなり、各自が防衛しなければならなくなった。関東軍報道班長長谷川大佐は、「日本人の生命財産は、関東軍が守る」と放送したが、その軍はわれわれからみれば所在不明であった。夜間、われわれが自衛しているところに憲兵が低姿勢で状況を聞きに来た。中国側の監獄が破壊され、囚人が脱走したという。

八月十九日、ソ連軍入城により、戦車壕は、埋め戻せとのソ連側の命令により、われわれは、作業にかかった。地ひびきを立て、街中を侵入する戦車は、日本軍のもの

と比較にならぬぐらい大きかった。

作業が夕方にかかると、八路系の者と思われる中国人が、自動車にのり、ピストルを空に向かって発砲しつつ、われわれを威かくした。積年のうらみをはらすは、今こそといわんばかりであった。われわれは危険を感じ、作業を中止して帰宅した。わが店舗（事務所）は、加藤町十五番地の街角にあり、ただちに防空扉をウインドガラスに立て危難を防護した。帰宅するや暴徒は、街に襲来した。防扉のないビルは皆ガラスをこわされ、略奪されるにいたった。その夜、私達親子は、暴徒のくることを覚悟し、軍刀で防衛することにした。また、灰を状袋につめて、暴徒に目つぶしとすることにした。すでに昼間、日本人は暴徒に暴行を加えられる者があり、最悪を覚悟した。父は、万一の時は、私が脱出して日本に帰国するようにとの厳命を下し、親子悲壮な思いであった、一夜まんじりともしなかったが、さいわいにして無事であった。

しかし、日がのぼると共に暴徒は北側の電車通りに充満し、いっきょに突入して暴奪を開始する態勢を作った。

その数は万を超えるともえた。われわれは危険を感じ、急遽自衛団を組織し、これに対抗した。在郷軍人の中尉一人少尉一人が指揮にあたった。わずか数百人の自衛団はよく、暴徒に対抗した。もとより数においておよぶべきもないが、日本人が死にものぐるいに抵抗すれば、おそらくおそろしいと思ったのか、終日対立するのみであった。一部は電車通りから、抵抗の弱いほうへと迂回して、われわれのほうには侵入してこなかった。私の母をはじめ、女性は、炊き出しをし、握り飯を作って、腹ごしらえをした。さいわい昼間はぶじ終わった。夜は私の家(店舗)を屯所として、皆徹夜をした。夜中に時折銃声したが、ソ連兵が巡視を始めたので、われわれのビジネス街(卸商、会社等)は鎮静化した。又ソ連将校が近くに駐在したので、職業女性を派して慰安にあたらしめ、慰撫させた。不甲斐ないことであった。

しかし、翌日も暴徒は、南部の住宅所を迂回路奪をしたのが、逆にわれわれの街を通して中国人街に走り去った。ある者は馬車で、あるいは徒歩で。私の店舗の裏に警察官舎があったが、警官は家族と共に逃走した。復しゅ

うをおそれたのである。その頃宮団の鈴木造船所の幹部以下家族数十人が、私の家に頼ってきた。又本土防衛要員なる将校、卜士官のうち、数十人が親戚の大尉の懇請の下に保護を求めてきたので、これを受け入れて、保護した。保護さるべきわれわれが、保護すべき軍人を保護したのである。一行四百余人、捕虜となれば、早く帰国できるといってわざわざ申し出た将兵があった。最後まで私の言うことをきいていた将校は、後、いっしょに無事帰国した。

十月頃在郷軍人が、父をたずねてきた。中国人の建軍と称する者が、満州再建の為軍隊を作りたいので、協力して貰いたいといってきた。父は通訳を連れて城内(中国人街)におもむき、話し合った。しかし、老人の故を以て謝絶してぶじ帰宅した。当時在住者の有力者はあるいはソ連兵に射殺された者、家を占拠され、追い出された者、暴行略奪された悲惨な例が数々あった時だけにまったく安心した。又ソ連兵はわが家を占拠したが友好的であった。反面、中国共産軍と中央軍の満州占領で日によって、ある時はソ連、共産軍、又別の日に中央軍と国旗が

変わることもあり、敗戦国民は、まったくみじめであった。冬になると凍死者も出た。中央軍の将校と親しくなってもわれわれは亡国民といわれ、切齒扼腕するのみであった。生活は売り食いでも翌年胡蘆島にたどりつき、引き揚げの国旗をみて、始めて救われたと思った。

国旗を大事にせねばならぬ。いざとなれば、軍も領事館もあてにならぬ亡国民となることを知っておくべきだ。

敗戦後の記

岐阜県 松岡末次

「マーチオカおるか。」今夜もまた呼び出される。断ることのできぬ否応なしの呼び出しの声。零下十数度の冷気が外に出た途端に身を包む。保安隊員の出迎えた。旧陸軍の三八銃の安全装置を外す音が痛く響く。

保安隊詰所の中はストーブがゴーと音をたてて燃え、息が詰まるくらいの熱気である。「工員の某が病気で欠

勤した時、薬と言って毒薬を与えただろう。」そんな覚えは絶対無い。「嘘を言うな。」「嘘と言うなら証人を連れてきて欲しい。」「いつまで嘘を言う気だ。」「よく調べて欲しい。」「そんな問答の後は、「よく調べるから今夜は帰ってよろしい。」数日このような詰問が続き、最後はきまって、「帰ってもソ連の警備兵に絶対言ってはダメだぞ。」と念を押されて詰所を出る。「今夜も無事に済んだ。」とホッとしながら……。

松川氏の尋問途中での発疹チフスによる死亡。松尾氏と守衛長の安田氏が拉致されて以後戻らず、消息不明になった同僚だった各氏のことを思いながら、わが身の安全だったのに感謝し、凍てついた凍雪の凸凹に足を取られつつ、凍傷になった指を屈伸させながら帰る。いつも寝泊まりに來ている義勇隊の子供たちが大根をおろして凍傷になった指を癒してくれる。

「家内が産気づいて苦しんでいる。医者を頼んで欲しい。」と夜中に工員が頼みに來たが、夜中でもあり妊婦を運ぶ方法もなく、会社の守衛に「責任を取るから」と強引に会社のバスを出し、市街の産院を回り断られ続け